

# 戦前期における理想的女子像の「伝統／近代」 を捉える視点としての「音楽のたしなみ」 —研究動向にみる可能性と課題—

歌川 光一

## 1. 問題の所在

本稿の目的は、20世紀初頭から昭和戦前期における、理想的女子<sup>1)</sup>像の「伝統／近代」を捉える視点としての「音楽のたしなみ」の可能性を、研究動向を通じて具体的に提示することにある。

教育史、教育の歴史社会学研究（以下、「教育史研究」と略記）における、戦前期の理想的女性像をめぐる研究は、（男子に向けられた「立身出世」像に対して、）高等女学校の教育目標に掲げられた「良妻賢母」像の究明から開始された。深谷昌志が、前近代的、儒教主義的な「良妻賢母」像を想定した（深谷 1966→1998）のに対し、小山静子は、性別役割分業イデオロギーに基づきながら、再生産領域である「家庭」を通じて女性を国民化するために成立した、近代的な概念としての「良妻賢母」像を提示した（小山 1991、1999）。また、木村涼子は、婦人雑誌というイデオロギー装置によって提供された「主婦」像を明らかにしている（木村 2010）。

一方で、「良妻賢母」像が、未婚の女子にも向けられた教育目標であっ

---

1) 本稿では、佐々木啓子にしたがい、都市部の「新中間層」と「上流階級」を総称して、「都市中上流階級」と捉え（佐々木 2012）、以下、本稿で「女子」と述べるとき、この階級的女子を想定する。

戦前期における理想的女子像の「伝統／近代」を捉える視点としての「音楽のたしなみ」（歌川）

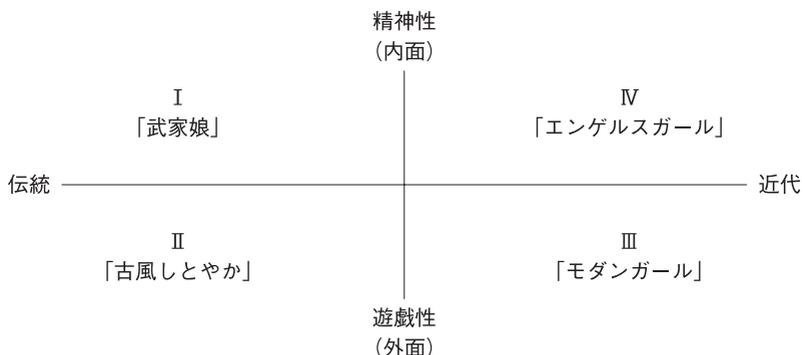


図1 教養女性の4類型

出典) 稲垣 (2009 : 3) より転載。

注) I・IIは、和漢の教養や弓・薙刀などの武芸、書道、茶道、華道や作法などを柱とする伝統的な「たしなみ」型教養を土台とするタイプ、III・IVは、近代的・西洋的な知や教養を志向するタイプである。

たにもかかわらず、その内容が基本的には、婚姻後の「妻」「母」としての規範でしかないことの矛盾に目が向けられるようになり、本田和子、吉田文、稲垣恭子による「女学生」研究（本田1990、吉田2000、稲垣2007）、渡部周子、今田絵里香による「少女」研究（渡部2007、今田2007）といった理想的女子像をめぐる研究が蓄積されてきた。これらの一連の研究は、戦前期における女性の年齢による規範の異同に着目し、その過程で、女子同士の「エス」のような同性思慕的な関係や、雑誌を介したヴァーチャルなネットワークの形成、女学生言葉などのサブカルチャーといった、未婚期特有の文化の実態、すなわち、「良妻賢母」像に収まらない、女学生の生徒文化や、その女子の大衆文化との接触状況を多様に描き出した点で示唆が大きい<sup>2)</sup>。

2) ただし、当初、公教育イデオロギーとしての「良妻賢母」像の探究を入口としていた戦前期の理想的女子像をめぐる研究も、テーマの多様化とともに、「学校という装置を通じた女子像の形成と浸透」という視点から離れつつあることで、青年文化、大衆文化研究との境目が曖昧になりつつあるとも言える。例えば、今田 (2007) は、「少女」を「小学校入学から女学校卒業までの学齢期の女子」のなかの「女学校に通い、少女雑誌を買い与えられていた女子に限定される」(同上 : 5) として、少女雑誌を主要な資料として「少女」像にまつる内容分析を行っているが、このアプローチに対して、木村 (2007) は「本書を読みながら、

戦前期における理想的女子像の「伝統／近代」を捉える視点としての「音楽のたしなみ」（歌川）

ところで、稲垣（2009）は、戦前期における理想的女性像として「伝統」「近代」が共存している（図1参照のこと）にもかかわらず、「伝統から近代へ」という図式が前提とされ、「伝統」は女性を抑圧する封建遺制、もしくは伝統主義への回帰という文脈からしか把握されてこなかった点を指摘する（稲垣2009）。

稲垣（2009）の指摘を踏まえ、再度教育史研究に目を向けると、理想的女子像の「伝統／近代」をめぐる問題、すなわち、戦前期の理想的女子像の構築過程において、「伝統」と「近代」が、（どちらかが駆逐されるという場合も含め、）どのような関係を築いたのか、という問題は、実は、通底した問題の一つであることがわかる。その片鱗は、既述の深谷（1966→1998）と小山（1991）の「良妻賢母」に対するスタンスの違いに、既に表われているが、「少女」研究や「女学生」研究においても、今田（2007）が指摘する「芸術主義」<sup>3)</sup>や稲垣が指摘する「たしなみ／モダン」という図式<sup>4)</sup>において、「伝統／近代」の問題が指摘されている。

教育史研究において、戦前期の理想的女子像をめぐる「伝統」の問題が扱われにくかった背景としては、確かに、良妻賢母主義や主婦イデオロギーの抑圧からの解放、という前提が敷かれ、「伝統」的な女子像それ自体

---

これは『少女』の研究なのか、『少女雑誌』の研究なのか、あるいは『少女の友』の研究なのかという疑問が浮かんでくることがあった。本書は活字文化と『少女』を切り離せないものとして論じているが、両者の深い結びつきは、著者が少女雑誌という『入り口』を選んだ時に生じたものとは言えないだろうか（同上：124）と述べている。

- 3) 戦前期において女子が抱いた成功観に関して、今田（2007）は、少女雑誌の分析から、「立身出世」を目的に生きる男子に対して、女子が唯一成功の手段と捉えたのが近代西洋芸術のプロになる道であり、これを「芸術主義」と名づけている。今田によれば、近代西洋芸術のプロになるには、多くの文化資本が必要であったため、たとえそれに憧れを抱いても結果として大半の女子は、そのような成功を収めることはできず、芸術主義は女子に憧れを抱かせながら、それに失敗しても、「努力」や「才能」の無さとして納得してクーリングアウトさせ、結果として家庭に収める巧妙な社会的装置として機能した（同上：129-132）。
- 4) 稲垣（2007）によれば、当時の女学生文化は、「モダンな教養文化」（近代的学問や教養、西洋音楽や芸術など）、「たしなみ文化」（伝統的な和漢の教養や、茶道、華道、箏、三味線等の遊芸など）、「大衆モダン文化」（雑誌、映画、ラジオ等を媒介とするファッション、髪型、持ち物などの流行や「女学生ことば」などのサブカルチャー）のいずれにも接触しつつ、特化されない、捉え難いものであり、それゆえに社会的批判を招いた（稲垣2007：206-220）。

戦前期における理想的女子像の「伝統／近代」を捉える視点としての「音楽のたしなみ」（歌川）の探究が等閑視されやすかったことも理由の一つとして考えられる。しかし、それ以前に、必ずしも学校教育を通じた教養を重視するとは限らない<sup>5)</sup> 女子の理想像の女子像を追う際の視点が定まりづらいという、研究上の制約によるところが大きいのではないかと考えられる。

本稿では、理想的女子像をめぐる「伝統／近代」の問題を視野に入れつつ、それを捉える視点としての「音楽のたしなみ」の可能性と課題を、研究動向を通じて具体的に提示する。

以下では、稲垣（2009）が示唆する「たしなみ」という視点の可能性について説明し、教育史研究において理想的女子像の「伝統／近代」を検討する際に、「音楽のたしなみ」という視点が有効であることを示唆する。

## 2. 「音楽のたしなみ」という視点

### 2-1. 「たしなみ」

「たしなみ」は、今日においても、「身だしなみ」「酒のたしなみ」など、用例は多様であるが、桜井役によれば、「嗜み好むこと、転じて、心掛けることをいひ、自ら進んで礼法を修めようとする心構えをいふのであって、嗜みは、家庭や学校で躰をうけ、教をうける間に養はれる」（桜井 1942：62）のものである。また、大西昇によれば、それは、「単なる享受でも、芸術の創作や鑑賞でもなく、倫理の概念で蔽ひ晝されず、又、美容術とも教養とも学問とも異なつてゐて、しかも此等のすべてに關聯性を有する」（大西 1943：251）のものである。いずれにしても、「読書を中心とした学問や教養に比べて」、「『たしなみ』においては、『稽古』や『こころがけ』によって、知識の習得だけでなく身体を通してそれらが身につけられていく

---

5) 天野郁夫は、「近代化の初期段階には、家業をふくむ家事に従事しながら、裁縫を中心としたならい事やけいこ事をして、あるいは他家に修業・修養のために住み込んで、結婚にそなえ」ていたが、「そこに、高等女学校の教育が入りこみ、『空白』を埋めるものとして、重要な位置をしめるように」（天野 1990：55）なった、と述べる。

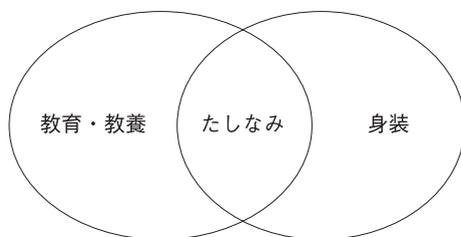


図2:「たしなみ」の位置

過程が重視される」(稲垣 2009: 2)<sup>6)</sup>。

「たしなみ」は、「趣味」よりも古くから用いられた概念であり<sup>7)</sup>、学校教育を通じた「教育」や「教養」という学問知としては周知的ではあり、「身装」というほどには外面的ではない、中間的な概念として捉えることができるだろう(図2)。

## 2-2. 「音楽のたしなみ」

それでは、理想的女子像の「伝統／近代」を考察する上で、「たしなみ」の考察対象をどのように定めるのが適当だろうか。

今田(2007)が指摘する「芸術主義」のように、教育史における理想的女子像の研究にとって、「伝統／近代」の問題が課題となる「たしなみ」として、「芸術のたしなみ」の存在を挙げることができる。本稿では、「芸術のたしなみ」の中でも「音楽のたしなみ」に着目する。その理由は、①「邦楽／洋楽」という「伝統／近代」の考察が行うことができる、②実態として、戦前期の芸術的たしなみの中でも、大規模に行われていたと考え

6) 稲垣(2009)が述べるように、身体性を重視する自己形成概念として「たしなみ」を想定するとき、女性とメディアをめぐる文化史研究の中で、戦前期の理想的女子像の「伝統／近代」の問題を扱っている領域として、「身装」に関する研究がある。「身装」とは、高橋晴子によれば、「身体と装いというふたつのことばの合成で」あり、「個人的魅力の表現」と「自分の所属を示すサインとして」身にまとう、髪型、服装、化粧などの文化の総称である(高橋 2005: 6)。

7) 「趣味」は1873年には概念として登場しており、明治20年代になると雑誌その他でも使用されたが、座談、平話など、一般の人々の間で流行したのは、明治40年頃である(神野 1994: 6-13)。なお、「たしなみ」の語用の詳細については、別稿に譲りたい。

戦前期における理想的女子像の「伝統／近代」を捉える視点としての「音楽のたしなみ」（歌川）

表 1：東京府内就学者層女子の主要な稽古事とその割合

①	属性	調査年 (調査数)	主要な稽古事とその割合 (%)									
			箏	4.8	長唄	4.4	常磐津	2.1	生花	1.2	茶の湯	0.4
②	小学校女兒	1913年 (2501)	箏	4.8	長唄	4.4	常磐津	2.1	生花	1.2	茶の湯	0.4
③	高等女学校 生	1913年 (634)	箏	47.9	長唄	29.8	生花	17.1	茶の湯	15.4	清元	1.7
④		1928年 (1155)	箏	27.3	長唄	23.6	生花	12.7	ピアノ	6.4	踊	4.7
⑤		1931年 (1148)	生花	8.5	長唄	7.0	箏	6.4	三味線	5.2	ピアノ	4.5
⑥		1934年 (447)	ピアノ	38.7	舞踊	16.1	長唄	11.8	箏	10.6	生花	9.6
⑦	高等女学校 卒業生	1917年 (738)	生花	44.5	裁縫	27.9	箏	27.5	茶の湯	21.6	料理	5.1
⑧		1935年 (1251)	生花	54.1	裁縫	44.5	茶の湯	22.2	料理	16.3	書道	12.6

出典) 拙稿 (2012b: 77) より転載。

注 1) すべて複数回答可。ここでは上位 5 位のみを挙げる。

注 2) 斜字体は音楽を示す。

i>

出典) 国立国会図書館、野間教育研究所に所蔵されている東京府内高等女学校の学校沿革史、学校要覧及び高等女学校生の実態に関わる文献を参照し、作成。具体的には、①東京府教育会編 (1916)『通俗教育に関する調査』pp.248-249、②稲垣 (2007: 30)、③東京府立第一高等女学校 (1928)『創立第四十周年記念誌』pp.161-162、④東京府立第一高等女学校 (1931)『本校の現状』p.59、⑤稲垣 (2007: 24)、⑥桑原 (1982)『高等女学校の成立 高等女学校小史・明治編』高山本店、pp.159-160、170-172、⑦東京府立第五高等女学校 (1935)『東京府立第五高等女学校要覧』pp.212-214。

られる (以下表 1 参照)<sup>8)</sup>、③楽器がモノとして存在しているため、他の芸術的たしなみよりも、「音楽をたしなむ女子」を視覚的に把握することができる、ためである。

これらの理由のうち、①については、詳述しておきたい。

今日の視点から、戦前期の「音楽のたしなみ」を「邦楽／洋楽」に分類すること、そしてそれを「伝統／近代」という問題系と対応させることは、一見、非歴史的である。しかし、明治初期においては、芸娼妓や、就学を拒む女子を連想させる「三味線をたしなむ女子」を社会的にどのように評

8) 戦前期の就学者層女子の稽古事の実態として、稲垣恭子ら (2004) は、昭和期に関西の高等女学校に所属していた女学生 1248 人の実態調査から、稽古事として、茶道 (32.5%)、華道 (29.0%)、ピアノ (25.3%)、書道 (21.1%)、箏 (11.3%) 等が上位を占めていたことを明らかにしている。

戦前期における理想的女子像の「伝統／近代」を捉える視点としての「音楽のたしなみ」(歌川)

価値するかが、就学との関連から、問題視されていた(倉田1989、佐伯1990、麻生1998、関口2005、矢島2007、石堂2008、鍋本2011、Tanimura 2011、拙稿2012a)。そして、一方で、度々指摘されるように、高度経済成長期の都市新中間層の拡大に合わせて、女子を中心として、ピアノブームが生じ、家庭の文化資本戦略として機能した(水野2001、高橋2001、井上2008)。本稿で関心を持つ、20世紀初頭～昭和戦前期は、この「三味線をたしなむ女子」と「ピアノをたしなむ女子」の間を、理想的女子像が揺れ動く時期であり、「音楽のたしなみ」は、理想的女子像の「伝統／近代」を検討する際の重要なメルクマールとなり得ると考えられる<sup>9)</sup>。

それでは、音楽学研究および関連研究(以下、「音楽学研究」と略記)において、戦前期における女子と「音楽のたしなみ」をめぐる問題は、どのように論じられ、またどのような課題を残しているのだろうか。

以下、研究動向を、「家庭」(3.)、「少女」(4.)、「令嬢」(5.)、「職業婦人」(6.)に分けて概観し、その到達点と課題を提示する(7.)。

### 3. 「家庭」と「音楽のたしなみ」

「三味線をたしなむ女子」「箏をたしなむ女子」は、基本的には、屋内での稽古、発表を連想させるが、近代化の過程で、「家庭」という私的領域が出現する中で、音楽のたしなみのあり方や、その内容にも変化が迫られる。「家庭」は、「公共領域と家内領域との分離を前提として、私的領域・女性領域と観念されていること、人間の再生産を担っていること、家族成員の情緒的絆が重視されていること、この三点の特徴をもった家族」を意

---

9) 合わせて、そもそも、表1にある通り、戦前期の女子にとって邦楽のたしなみが、今日に比べ、そう遠くない存在であったことも、忘却されるべきではないだろう。

なお、戦前期における女子の「音楽のたしなみ」の実態にまつわる研究は、以下のようなものを挙げることができる。邦楽も含めた高等女学校の音楽教育史研究として、田甫(1981)、矢島(1998)、仲(2011)、丸山(2011)、戦前期における子どもの音楽経験の研究として、浜松(1986)、本多ほか(1999)、坂田(2002)、権藤(2006)、とりわけ、音楽の通信教育史に関して、藤波(2005)、上野(2011)など。

戦前期における理想的女子像の「伝統／近代」を捉える視点としての「音楽のたしなみ」（歌川）味し（小山 1999：ii）、明治 20 年頃に概念として登場すると、雑誌、新聞、博覧会等を媒介として普及し、日露戦争後の産業化の進展、第一次世界大戦後の新中間層の拡大に伴い実態化していった（同上：29-65）。この「家庭」および「家庭音楽」言説に関わる音楽学研究において、「音楽のたしなみ」への言及がなされてきた。

まず、細川周平は、主に音楽雑誌を資料としながら、1910 年代に、音楽産業とジャーナリズムによって、「家庭音楽」という概念が構築され、1920 年代に解体されるまでの言説と、「家庭音楽」概念が在来の音楽文化にどのように変化をもたらしたかを明らかにしている。同論文によれば、「家庭音楽」は、日露戦争後に「趣味」ブームが起こり、「『よい趣味』がステータスにつながる回路の完成と、それを実現する消費文化の勃興」（細川 2003：36）が交差することで、実質的な概念となり、市民的な「趣味の涵養」の手段として捉えられるようになる。同時に、「一家団欒」をキーワードに、西洋風の「夫婦と親子が外からは容易に侵入できないほど強い絆で結ばれた情緒的なユニットとしての家族生活」（同上：38）が理想化され、その役割が「主婦」や「娘」に期待されることとなってゆく。

続いて、周東美材も、同時期の音楽ジャーナリズムや百貨店事業に着目し、そこに現れる「家庭音楽」言説から、近代日本における家庭の生成について考察している。同論文によれば、「家庭音楽」は、1910 年代の音楽雑誌では、一家団欒を形成する契機として語られ、女性と子どもの役割として西洋音楽の導入が叫ばれたが、1920 年代には、百貨店事業として可視化される。時期を同じくして、蓄音機とレコードの時代が到来し、「家庭的な音楽」が大量に供給されることで、「家庭音楽」は実践として安定することとなった（周東 2008）。

以上のように、「家庭音楽」言説をめぐる研究では、音楽雑誌等を資料に用いながら、1910 年～20 年代にかけて、「家庭」における女性や子どもの「音楽のたしなみ」の役割やその変容を指摘しているが、「和楽器／洋楽器」の違いを重視したものではない。

戦前期における理想的女子像の「伝統／近代」を捉える視点としての「音楽のたしなみ」(歌川)

しかし、その後、楽器ごとに、そのたしなみと「家庭」の関係を明らかにした研究が登場している。

上野正章は、ヴァイオリンの通信教育の展開を考察する過程で、大日本家庭音楽会誌『家庭音楽』において、多くの会員が、投稿によって孤独を訴えるのに比して、家庭音楽についての報告がそれほど見られない点を明らかにしている。このことから、上野は、「家庭音楽は西洋音楽を習い始める建前だったのではないだろうか」(上野 2011: 92) と推測する。

また、拙稿 (2011a、2011b) は、明治後期～大正期の女性の邦楽のたしなみに着目し、和楽器と「家庭」の関係について、当時の代表的婦人雑誌の内容分析を行っている。箏について、拙稿 (2011a) によれば、明治 20～30 年代前半、箏は、西洋楽器と共に「一家団樂」の手段、もしくは主婦役割としてその演奏が期待されつつも、娘を溺愛する親を連想させ、「子どもへの教育意識」にも欠けるものとして論じられるが、日露戦以後、階層を越えた「一家団樂」創出に寄与し、妻が夫を慰労する「趣味」、もしくは婦人向けの職業として着目される。また、大正期に入り新中間層の拡大が始まると、箏は、一家団樂のみならず、女性が不遇に備える職業として、また、子ども、とりわけ娘の趣味涵養の手段として紹介される (拙稿 2011a)。一方、三味線について、拙稿 (2011b) によれば、三味線は、婦人雑誌において、19 世紀末、未就学の娘や芸娼妓を連想させる近世の遺物として論じられたが、日露戦争期以後の生活再編の動向を背景に、下層階層でも入手可能な楽器、また、妻が夫を慰労する手段として採り上げられ、新中間層の拡大期に当たる大正前期には、母親の立場から子どもの稽古事として容認される。同論文では、①日露戦争、第一次世界大戦を契機とする階層変動の際に、三味線を含む遊芸に対して、その芸術性如何よりも、「一家団樂」を中心とする「家庭」の要求する新たな家族関係に寄与し得る、という機能面へと社会的関心が移ったこと、②家庭の生成を通じて、娘の遊芸習得の社会的意味は、結果として、「因習的な手すざび」から「子どもかつ未来の主婦として一家団樂を創出するための準備」へと

戦前期における理想的女子像の「伝統／近代」を捉える視点としての「音楽のたしなみ」（歌川）  
変化したことを示唆している（拙稿 2011b）。

以上のように、「家庭」と「音楽のたしなみ」に関連する研究においては、基本的には洋楽の導入を想定していた「家庭音楽」概念が、音楽雑誌に登場するのみならず、婦人雑誌における邦楽論などにも影響していることが明らかになっている。明治後期～大正期において「家庭音楽」が実際にどのように実践されたかは定かではないものの、同時期において「家庭音楽」概念を鍵概念として、女子の「音楽のたしなみ」の社会的位置づけが再編され、邦楽のたしなみの威信が必ずしも失墜したわけではないことが指摘されている。

#### 4. 「少女」と「音楽のたしなみ」

「少女」像は、1890年から1910年にかけて、中等普通教育の男女別学・別カリキュラム化と少年少女雑誌の創刊を背景に、「少年」から排除されながら登場した。「少女」は高等女学校に通うエリート、中以上の階層に位置し、西洋文化に理解があることを示す記号として機能したが、1930年代には、都市新中間層の量的な拡大とともに、学歴競争の激化を背景として、少年と類似した「子ども」へと近づいたという（今田 2007：225-231）。

本田（1990）を嚆矢とする「少女」研究の影響を受け、音楽学研究においても、少女雑誌を用いて研究が開始される。坂本麻実子は、1922年に創刊された『令女界』に着目し、歌曲の分析とともに、戦前期の女学生にアンケート調査を行い、社会的に、音楽能力の上で「素人」と「専門家」の間とみなされた女学生が、卒業後も歌曲の記憶を持ち続けたことを示唆している（坂本 1992）。

さらに、坂本（1993）は、レコードに先立って、近代の少女雑誌が、「音楽メディアとして、月刊とビジュアル性という特性を生かして、少女読者のためのオリジナル歌曲を東京から全国に発信していた」ことに着目

戦前期における理想的女子像の「伝統／近代」を捉える視点としての「音楽のたしなみ」（歌川）

し、少女歌曲（少女唱歌、少女動揺、少女小曲）が、大人の男性が理想化した少女性を表現したものでありつつも、読者である女子が、歌の中の少女性の表現の美しさに納得する限りに、声やピアノの高度な技巧を厭わず、自己を仮託していたことを明らかにしている。同論文において、少女歌曲が「絵と詩と音楽の、複合的な創作ジャンル」（同上：65）であることを指摘している点は、少女雑誌を用いた分析を行う際の視点として興味深い。

玉川裕子は、今田（2007）の関心を引き継ぎながら、邦楽のたしなみにも配慮しつつ、戦前期の代表的少女雑誌『少女の友』の分析を行っている。同論文では、口絵、挿絵、小説、広告などに着目しながら、第一次世界大戦勃発前後までは、箏とピアノは、「経済的にゆとりのある家庭の娘をあらわす記号として、あまり差がない」（玉川 2008：16）こと、1920年代には、「箏／それ以外の和楽器で形成されていたポジティブ／ネガティブの対比が、洋楽器／和楽器という対比に移っていき、箏がかつて帯びていたポジティブなイメージが薄れはじめていく」（同上：29）こと、ただし、「形状からしても移動が困難で、いずれかの場所に固定されざるを得ない」（同上：35）ピアノの方が、ヴァイオリンよりも、良妻賢母像に適していたことを明らかにしている。

これらの研究を概観する限り、「少女」は、洋楽のたしなみに親和的であったことが示唆されるが、「少女」にとって、音楽のたしなみを通じた将来像が何を意味していたかまでは十分明らかになっていない。

## 5. 「令嬢」と「音楽のたしなみ」

さて、近年、女性とメディアをめぐる文化史研究においては、必ずしも学校教育を入口としない、新聞や雑誌をはじめとするマス・メディアにおける理想的女子像の研究が盛んになりつつある。川村邦光は、未婚の女子が、『女学世界』『婦人世界』『婦女界』などのグラビアに登場する上流・ブルジョア家庭を理想の家庭として思い描き、現在の境遇を「逆境」とし

戦前期における理想的女子像の「伝統／近代」を捉える視点としての「音楽のたしなみ」（歌川）

て捉えたと推測する（川村 1993）。また、佐久間りかは、明治後期以降、婦人雑誌のグラビアに、上流階級の女性が紹介され始めたことによって、「誰もが『見られる』時代」が到来し、「素人」女性と、それまで人の視線を浴びるという意味において特権的な位置にあった「玄人」女性（芸妓）の区別が曖昧化したことを指摘する（佐久間 2005）。黒岩比佐子も、明治後期に創刊された『婦人世界』『女学世界』『婦人画報』のグラビアや広告に着目しながら、そこに登場する「令嬢」や、そのイメージを利用した化粧品、美顔術などが、新たに出現した中流階級の読者の憧れになったとする（黒岩 2008）。さらに、佐伯順子は、新聞や雑誌の「写真入りの女性関連記事」に着目し、女学生、芸者、令嬢、教育者、看護婦、女工といった、明治期における女性の多様な表象の存在を明らかにしている（佐伯 2012）。

これらの研究群が示すように、「少女」が、女学校と雑誌という空間の中で、「良妻賢母」とは異なる規範として成立し、女子にとって魅力あるジェンダー・アイデンティティであった一方で、「家の娘」（久米 2013：98-106）、「孝行娘」（今田 2007：103-105）といった表象も消え去ったわけではない。それらは、メディアの中で、「令嬢」と形容されつつ、戦前期を通じて存続し続けた。

近年の音楽学研究では、教育史研究に比して、この「令嬢」に着目した研究が蓄積されつつある。以下、「小説」に着目した研究と「令嬢のプロフィール」に着目した研究に分けて紹介する。

### 5-1. 小説にみる

まず、玉川（1998）は、夏目漱石の小説の舞台が山の手であることに着目しながら、そこに登場する「令嬢」と「音楽のたしなみ」の関連を明らかにしている。同論文において、玉川は、夏目漱石の作品の登場人物がたしなむ楽器として、邦楽は決して排除されているわけではないものの、山の手的生活として、洋間、リボン、アイスクリーム、「パパ、ママ」といった親の呼び方とともに、良家の令嬢がピアノをたしなむ様子が、上昇

戦前期における理想的女子像の「伝統／近代」を捉える視点としての「音楽のたしなみ」（歌川）志向の強い中流階級に無意識のうちに読み込まれたことを示唆する。玉川は、この過程で、ピアノをたしなむ女子が、自らの意思を表明しないのに対し、ヴァイオリンをたしなむ女子は、男性から自立して生きる可能性を秘めていることを指摘している（同上：85-88）。

続いて、高橋美雪は、玉川（1998）の視点を引き継ぎながら、ヴァイオリンに焦点を当てて、小説における「令嬢のたしなみ」としてのヴァイオリンのイメージを検討している。同論文においては、夏目漱石『吾輩は猫である』の他にも、石川啄木『雲は天才である』、尾崎紅葉『金色夜叉』、小栗風葉『青春』なども用いながら、ヴァイオリンをたしなむ女子に対して、「教養があって華やかで新時代の只中にあるハイカラな女性としてのポジティブなイメージ」とともに、「その新しさゆえに男性にとって生意気で鼻につくことが否めないというネガティブなイメージ」（高橋 2001：163）が提供されたことを明らかにしている<sup>10)</sup>。

## 5-2. 「令嬢」のプロフィールにみる

既述のように、明治後期以降、新聞・雑誌をはじめとするメディアにおいて、一般の女子もグラビアを飾るようになったことから、音楽学研究においても、それに着目した研究が蓄積されている。

高月智子・能澤慧子は、「音楽のたしなみ」そのものを考察対象とするわけではないが、『婦人グラフ』（国際情報社、1924-1928）における「若い女性の紹介」というグラビア欄に登場した令嬢のプロフィールを整理している（高月・能澤 2003、図3参照）。ここでは、1920年代の「令嬢」のたしなみとして、ピアノが重視されつつも、邦楽、とりわけ長唄の威信も低くないことが示唆されている。

津上智実も、小倉末子をめぐるイメージを中心としつつも、婦人向けグラビア雑誌における「令嬢」と音楽の関係に着目し、1920年代に、箏な

---

10) 20世紀初頭のヴァイオリン界の概況については、邦楽界の動向との関連から論じたKajino (201) に詳しい。

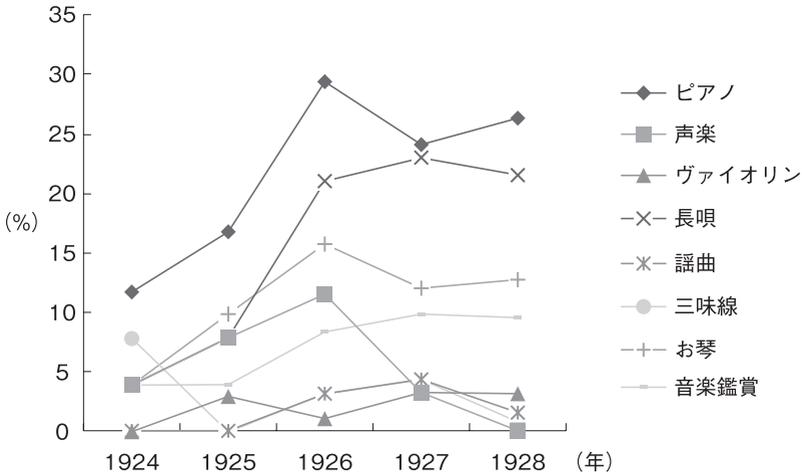


図3：『婦人グラフ』における音楽をたしなむ令嬢の割合

出典 高月・能澤（2003：192）の「表4」を整理し、グラフ化。

どの邦楽に加えて、ピアノが「令嬢」の教養として中心的な位置を占めていたことを明らかにしている（津上2012a、2012b）。

以上の婦人向けグラビア雑誌の分析に対して、周東（2011）は、『趣味大観』という資料の特徴とともに、そこに記載された「令嬢」の音楽のたしなみについて整理している。同論文によれば、『趣味大観』に紹介された全346名によって、「代表的趣味」としてあげられた上位5位の趣味は、「ピアノ」87名（25.1%）、「長唄」70名（20.2%）、「日本舞踊」22名（6.4%）、「音楽」19名（5.5%）、「箏曲」19名（5.5%）となっており、これに加え、プロフィールに経験として言及されている趣味も含めれば、上位5位は、「ピアノ」208名（60.1%）、長唄139名（40.2%）、箏曲64名（18.5%）、日本舞踊49名（14.2%）、ヴァイオリン15名（4.3%）、となっている（同上：66-68）。この結果は、同じく「令嬢」の音楽のたしなみを量的に表した、既述の高月・能澤（2003）の結果と類似しており、昭和戦前期においてピアノと共に、長唄、箏といった邦楽のたしなみが「令嬢」像にとって重要だったことが示唆される。

## 6. 「職業婦人」と「音楽のたしなみ」

「職業婦人」は、「戦前期の日本において従来男性の仕事とされてきたやや事務的で専門的な分野や第三次産業の発展に伴い新しく誕生した分野の職業に就いた女性」(山崎 2009 : 93) を指す。一般に、日露戦争後、戦争未亡人の出現や、増税によって、第一次世界大戦期には、物価騰貴による生活難といった経済的要因によって職業熱が高まったことが知られているが、永原和子によれば、特に生活難に関しては就学者層女子も無縁ではなく、実際、これに対処するため、各種の職業学校への進学、特に地方から遠く家庭を離れて大都市へ遊学することが盛んになり、「女子遊学案内」「男女修学案内」「女子就業案内」等と題する出版物が数多く出された(永原 1982)。「職業婦人」に対しては、当初、「良妻賢母」からの逸脱とみなされる場合もあったが、「第一次世界大戦後に欧米から輸入された『女性解放』を推進させようとする立場からは」、肯定的に捉えられ、「職業婦人が社会的に認知されていく過程で、『あるべき理想の女性』イメージをめぐり、『良妻賢母』と『社会的に自立した女性』の対立が顕在化し」(山崎 2009 : 94) 始めた。

このような時代状況下で、実際に洋楽のプロとして活躍した女性については、玉川(2012)が既に整理しているように、数多くの評伝が存在している<sup>11)</sup>。しかし、一般的な「女子」の職業意識の観点から、邦楽も含めた「音楽のたしなみ」について考察した論稿は、数少ない。ここでは、2点紹介する。

まず、鈴木幹子は、両大戦間期における(音楽を含む)稽古事と女子職業論の関連に関しては、『主婦之友』の分析から、夫の戦死や病死などの「万が一」に備えて女性の稽古事文化が広まったことを指摘している(鈴

---

11) 具体的には、幸田延、安藤幸、田中希代子、原智恵子、久野久子、小倉末子、三浦環、柳兼子、吉田隆子など(玉川 2012 : 47)。

戦前期における理想的女子像の「伝統／近代」を捉える視点としての「音楽のたしなみ」（歌川木 2000）。

次に、拙稿（2012b）は、明治後期～大正期における職業案内書および婦人雑誌の記事から、職業と、和洋の「音楽のたしなみ」の関連を明らかにしている。同論文によれば、楽器習得を要する職業（女師匠、女性音楽家、女性教員）の案内は、邦楽／洋楽の区別に関わりなく、職業案内書では、1900年代当初より、婦人雑誌では日露戦争後より、登場した。一方、婦人雑誌においては、女性教員は成功者として登場することはなく、女流音楽家についても、家庭に収まらず、その習得についても、読者が安易に目指すべきでない選択肢、という議論が提供された。一方、箏、三味線を中心とする女師匠に関しては、憧れるべき対象として紹介されるわけではなかったが、その習得については、中・上層女性が青少年期から準備しておくことで、世渡りの手段となることが強調されていた。良妻賢母主義的女性雑誌の情報は、「世渡りとしての邦楽習得／憧れではあるが虚栄を招きかねない洋楽習得」という図式を、強調していたとされる（拙稿 2012b）。

これらの研究は、資料として婦人雑誌を用いているが、雑誌メディアに登場する洋楽の「プロ」と邦楽師匠が即座に比較可能なのか、という点には留意が必要であろう。職業意識と「音楽のたしなみ」を議論する際は、前提として、教習を成立させていた地域の先生・師匠の実態に関する整理がまず必要になるだろう。

## 7. まとめと課題

本稿では、教育史研究における理想的女子像をめぐる「伝統／近代」の問題を視野に入れつつ、それを捉える視点としての「音楽のたしなみ」の可能性を、研究動向を通じて具体的に提示することを試みた。本稿で確認したように、音楽学研究においては、「家庭」「少女」「令嬢」「職業婦人」といった観点から、女子の「音楽のたしなみ」にまつわるイメージの研究が蓄積されつつある。これらは、音楽教育史という観点から見れば、邦楽

戦前期における理想的女子像の「伝統／近代」を捉える視点としての「音楽のたしなみ」（歌川）を含めた、学校外の音楽教育学研究としても位置づけることが可能であろう。しかし、一方で、本稿で挙げた研究の多くが、女性向け雑誌をはじめとするメディアの特性に着目しながら、そこに表象される「音楽のたしなみ」を分析していたことを踏まえると、「戦前期において、理想的な女子像の構築のために、どのように音楽のたしなみを利用しようとしたか」という女子教育史研究の課題として引き取ることも可能であると思われる。それは例えば、本稿のレビューで示唆されたように、「少女」のたしなみとしては洋楽に重点が置かれているようでありながら、「令嬢」のたしなみとしては邦楽も大きな比重を占めている、といった点に現れる。「音楽のたしなみ」の表象を追うことで、「近代」的女子像を強調するメディアと、「伝統」的女子像を強調するメディアの特性や、それを消費する読者層の心性も推し測ることが可能になるだろう。

しかし、指摘するまでもなく、「音楽のたしなみ」をめぐる音楽学研究は、対象とする年代や、用いる史資料も限定的であり、未だ試論の域を出していない。今後は、ヴィジュアル・イメージの分析手法などに配慮した、より体系的な研究が必要になってくるだろう。

## 引用・参考文献

- 天野郁夫ほか（1990）「戦前期中等教育における教養と学歴：篠山高等女学校を事例として」『東京大学教育学部紀要』29、pp. 53-80.
- 麻生千明（1998）「明治期における学齢女子の不就学要因としての遊芸の稽古と子守についての考察—明治期東北地方における女子の就学状況と女子教育観に関する一考察・その2」『地域総合文化研究所紀要』第10巻、pp.1-24.
- 藤波ゆかり（2005）「箏曲教習の歴史的展開 通信講座、雑誌、ラジオによる啓発」『音楽教育史研究』第8号、pp.37-46.
- 深谷昌志（1966 → 1998）『教育名著選集② 良妻賢母主義の教育』黎明書房
- 権藤敦子（2006）「近代における個人の音楽経験と地域文化の関わり—明治20年代生まれの女性のライフ・ストーリーを手がかりに—」『民俗音楽研究』31、pp.24-35.
- 浜松敦子（1986）「民衆の音楽活動と唱歌教育の関連性についての一考察—東京都台東区住民の実態調査にもとづいて—」『音楽教育学』第15号、pp.76-87.

- 戦前期における理想的女子像の「伝統／近代」を捉える視点としての「音楽のたしなみ」（歌川）
- 本田和子（1990）『女学生の系譜—彩色される明治』青土社
- 本多佐保美ほか（1999）「東京女子高等師範学校附属国民学校の音楽—文献資料と当時の子どもたちへのインタビューに基づく音楽授業—」『音楽教育史研究』2、pp.37-47.
- 細川周平（1998）「近代日本音楽史・見取り図」『現代詩手帳』1998年5月号、pp. 24-34.
- （2003）「家庭音楽—団欒にピアノが聞こえ」細川周平研究代表『近代日本における西洋音楽文化の衝撃と大衆音楽の形成—黒船から終戦まで』平成11—14年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））、pp. 33-43.
- 今田絵里香（2007）『「少女」の社会史』勁草書房
- 稲垣恭子（研究代表）（2004）『関西地域における高等女学校の校風と女学生文化に関する教育社会学的研究』科学費補助金成果報告書
- （2007）『女学校と女学生 教養・たしなみ・モダン文化』中央公論新社
- （2009）「武家娘と近代—女のいくさ」と言説空間『教育・社会・文化』第12号、pp.1-10.
- 井上好人（2008）「幼児期からのピアノレッスンによって身体化された文化資本のゆくえ」『金沢星稜大学人間科学研究』2（1）、pp.1-6.
- 石堂彰彦（2008）『「読売新聞」の開化と『伝統』—三味線と学問をめぐる議論—』『成蹊人文研究』第16号、pp.49-61.
- 神野由紀（1994）『趣味の誕生—百貨店がつくったテイスト』勁草書房
- Kajino Ena（2013）A Lost Opportunity for Tradition: The Violin in Early Twentieth-Century Japanese Traditional Music. *Nineteenth-Century Music Review*（10）293-321.
- 川村邦光（1993）『オトメの祈り—近代女性イメージの誕生』紀伊國屋書店
- 木村涼子（2010）『〈主婦〉の誕生—婦人雑誌と女性たちの近代』吉川弘文館
- 小山静子（1991）『良妻賢母という規範』勁草書房
- （1999）『家庭の生成と女性の国民化』勁草書房
- 久米依子（2013）『「少女小説」の生成—ジェンダー・ポリティクスの世紀』青弓社
- 黒岩比佐子（2008）『明治のお嬢さま』角川学芸出版
- 河田敦子（2008）「女子教育の推奨」荒井明夫編『近代日本黎明期における「就学告諭」の研究』東信堂
- 木村涼子（2007）「書評：今田絵里香著『「少女」の社会史』」『教育社会学研究』81、pp. 122-124.
- （2010）『〈主婦〉の誕生：婦人雑誌と女性たちの近代』吉川弘文館
- 熊倉功夫（1990）「家元制度の復活」「芸事の流行」芸能史研究会編『日本芸能史第7巻』法政大学出版社、pp.55-74、221-238.

- 戦前期における理想的女子像の「伝統／近代」を捉える視点としての「音楽のたしなみ」（歌川）
- （2003）「日本遊芸史序考—数奇者と茶の湯—」熊倉功夫編『遊芸文化と伝統』吉川弘文館、pp.1-25.
- 倉田喜弘（1988）『日本近代思想体系 18 芸能』岩波書店、pp.381-390.
- （1989）「明治の邦楽情報（上）」『季刊邦楽』第 58 号、pp.83-85.
- （1999）『芸能の文明開化 明治国家と芸能近代化』平凡社、pp.44-52.
- 丸山彩（2011）「明治 10 年代～20 年代の京都府女学校・京都府高等女学校における音楽教育の展開」『音楽教育学』41（2）、pp. 13-24.
- 水野宏美（2001）「近代の家庭生活とピアノ文化」『哲學』106、pp.59-91.
- 鍋本由徳（2011）「幕末・明治初年の歌舞音曲と社会の諸相—娼芸妓解放と俗曲との関わり—」『研究紀要』第 24 号、pp.157-196.
- 永原和子（1982）「良妻賢母主義教育における『家』と職業」女性史総合研究会『日本女性史 4 近代』東京大学出版会、pp.159-164.
- 仲万美子（2011）「明治後期の女学生による洋楽／邦楽実践のあり方とその発表の「場」とは—『同志社女学校期報』記事を事例に—」『礼拝音楽研究』11、pp.33-56.
- 大西昇（1943）「たしなみの伝統と構造」大江精志郎編『世界観の哲学』理想社、pp.249-292.
- 佐伯順子（1990）『「文明開化」の『遊び』』『日本の美学』第 15 号、pp.185-202.
- （2012）『明治〈美人〉論 メディアは女性をどう変えたか』NHK 出版
- 坂本麻実子（1992）「大正時代の女学生向け雑誌『令女界』の歌曲」『お茶の水女子大学女性文化研究センター年報』5、pp.85-107.
- （1993）「音楽メディアとしての近代日本の少女雑誌とその歌曲」『人間文化研究年報』16、pp.55-67.
- （2006）『明治中等音楽教員の研究—「田舎教師」とその時代—』風間書房
- 坂田直子（2002）「子ども時代の音楽学習とその後の影響に関する一考察—主としてピアノ学習の口述史を通して—」『音楽教育史研究』5、pp.5-19.
- 佐久間りか（1995）「写真と女性—新しい視覚メディアの登場と『見る／見られる』自分の出現」奥田 暁子編『女と男の時空—日本女性史再考 V 闘ぎ合う女と男—近代』藤原書店、pp.187-237.
- 桜井役（1942）『礼法読本』増信堂
- 佐々木啓子（2012）「近代日本における都市中上流階級の階層文化と教育—その理論的検討と歴史社会学的分析枠組みの提示—」『電気通信大学紀要』24 巻 1 号、pp. 19-29.
- 関口すみ子（2005）『御一新とジェンダー 荻生徂徠から教育勅語まで』東京大学出版会

- 戦前期における理想的女子像の「伝統／近代」を捉える視点としての「音楽のたしなみ」(歌川)
- 周東美材 (2008) 「鳴り響く家庭空間—1910-20 年代日本における家庭音楽の言説」『年報社会学論集』第 21 号、pp. 95-106.
- (2011) 「書物のなかの令嬢—『趣味大観』にみる昭和初期東京の音楽—」『研究紀要』第 35 号、pp. 57-78.
- 鈴木幹子 (2000) 「大正・昭和初期における女性文化としての稽古事」青木保ほか編『近代日本文化論第 8 巻 女の文化』岩波書店、pp.48-71.
- 高橋晴子 (2005) 『近代日本の身装文化—「身体と装い」の文化変容』三元社
- 高橋一郎 (2001) 「家庭と階級文化—『中流階級』としてのピアノをめぐる—」柴野昌山編『文化伝達の社会学』世界思想社、pp.156-174.
- 高橋美雪 (2001) 「明治期のヴァイオリン—そのイメージと日本特有の受容の諸相—」『一橋研究』第 25 巻第 4 号、pp. 157-182.
- 高月智子・能澤慧子 (2003) 「1920 年代若い女性の理想像：「婦人グラフ」に見る令嬢たち」『東京家政大学博物館』第 8 号、pp.185-194.
- 玉川裕子 (1998) 「夏目漱石の小説にみる音楽のある風景—お琴から洋琴へ—」『桐朋学園大学研究紀要』第 22 集、pp.73-91.
- (2008) 『「ピアノを弾く女性」というジェンダー表象—近代日本の場合—』『ジェンダーと表現—女性に対する暴力を無くすためのもうひとつの視点からの試み—』2007 年度フェリス女学院大学学内共同研究報告書、pp. 23-36.
- (2012) 「音楽取調掛および東京音楽学校（明治期）教員のジェンダー構成」『桐朋学園大学研究紀要』38、pp.47-73.
- 津上智実 (2012a) 「婦人グラフ雑誌『淑女画報』（1912～1923）に見るピアニスト小倉末子と閨秀音楽家たち」『神戸女学院大学論集』第 59 巻第 1 号、pp.121-132.
- (2012b) 「明治大正期の『婦人画報』（1905～1926）に見るピアニスト小倉末子と閨秀音楽家たち」『神戸女学院大学論集』第 59 巻第 2 号、pp.169-182.
- 田甫圭三編 (1981) 『近代日本音楽教育史 II—唱歌教育の日本的展開』学文社、pp.336-349.
- Tanimura Reiko (2011) Practical Frivolities: The Study of Shamisen among Girls of the Late Edo Townsman Class. *Japan Nichibunken Japan Review*. (23) 73-96.
- 上野正章 (2011) 「大正期の日本における通信教育による西洋音楽の普及について—大日本家庭音楽会の活動を中心に—」『音楽学』56 (2)、pp.81-94.
- 歌川光一 (2011a) 「明治後期・大正前期婦人雑誌にみる箏と『家庭』」『音楽学習研究』第 6 巻、pp.19-28.
- (2011b) 「明治後期・大正前期婦人雑誌にみる三味線イメージの変容—家庭の生成と遊芸の近代—」『余暇学研究』第 14 号、pp.3-14.

戦前期における理想的女子像の「伝統／近代」を捉える視点としての「音楽のたしなみ」(歌川)

—— (2012a) 「明治初期小新聞にみる〈娘〉と三味線—遊芸の近代に関する一考察—」『生涯学習基盤経営研究』第36号、pp.77-85.

—— (2012b) 「明治後期～大正期女子職業論における遊芸習得の位置—楽器習得に着目して—」『文化経済学』9-2、pp.68-78.

渡部周子 (2007) 『〈少女〉像の誕生—近代日本における「少女」規範の形成—』新泉社

山崎貴子 (2009) 「戦前期日本の大衆婦人雑誌にみる職業婦人イメージの変容」『教育社会学研究』pp.93-112.

矢島ふみか (1998) 「明治期女子教育機関における音楽教育—邦楽を中心に—」『史櫻』3、pp.9-18.

—— (2007) 『箏三味線音楽と近代化』日本女子大学博士学位論文

吉田文 (2000) 「高等女学校と女子学生—西洋モダンと近代日本」青木保ほか編『近代日本文化論第8巻 女の文化』岩波書店、pp.123-140.